

地域の災害を考える (7)

「方丈記」に記載される地震災害

■ 「地域の災害を考える」をテーマに、シリーズでお届けしています。「方丈記」とは意外なことと感じられると思いますが、方丈記の件に地震の事が記されています。

時、今、熊本県から大分県にかけての九州中央部では、複数の断層が動き地震に因る甚大な災害が進行しています。方丈記が記されたのは1212年、今から800年程前になります。鴨長明の地震に対する経験と見方を読み取ってください。教えられることがあると思います。

ユク河ノナガレハ、絶^タエズシテ、シカモモトノ水ニアラズ。澱^{ヨドミ}ニ浮^ウカブウタカタハ、カツ消^キエカツ結^{ムス}ビテ、ヒサシク留^{トド}マリタルタメシナシ。・・・

この文言、記憶にあると思います。そうです。鴨長明作「方丈記」の書き出し文です。授業で受けた思い出としてこの書き出し部分がよみがえるでしょう。

過日、ラジオで方丈記に地震のことが述べられていることを伝えられました。授業では扱われなかったと思いながら、「岩波書店 新日本古典文学大系39 1989.1」を開き地震の項を見いだしました。

「大地震」ヲホナキと読みます。

又、同ジコロカトヨ^{ヲナ}①。ヲビタバシク大地震振ル^{ヲホナキフル}②コト侍キ。ソノサマ世ノ常ナラズ^{ハベリ}③。山ハクヅレテ河ヲウヅミ、海ハカタブキテ陸地ヲヒタセリ^ヨ④。土サケテ水涌キ出デ^{ツネ}⑤、巖ワレテ谷ニマロビ入ル^ヨ⑥。ナギサ漕グ船ハ波ニタバヨヒ、道ユク馬ハ足ノ立ち処ヲマドワス。都ノホトリニハ、在^{タフメウ}ト所ト、堂舎・塔廟ヒトツトシテ全カラズ^{マタ}⑦。或ハクヅレ、或ハ倒レヌ。塵・灰立チノボリテ、サカリナル煙ノ如シ。地ノウゴキ家ノヤブル、音^{ヲト}⑧、雷ニコトナラズ。家ノ内ニ居レバ、忽ニ拉ゲナントス^{ヒシ}⑨。ハシリ出ヅレバ、地破レ裂ク。翼ナケレバ空ヲモ飛

ブベカラズ。龍^{リョウ}ナラバヤ雲ニモ乗^ノラム。恐^{ヲソレ}レノナカニ恐^{オソ}ルベカリケルハ、只^{タダ}
 地震^{ナキ}ナリケリトコソ覺^{ハベリ}エ侍シカ。カクヲビタ、シク振^フル事ハ、暫^{シバ}シニテ止^ヤミニ
 シカドモ、ソノ余波^{ナゴリ}^⑩、暫^{シバ}シハ絶^タエズ。世^ヨノ常^{ツネ}^⑪驚^{ヲドロ}クホドノ地震^{ナキ}、二三十度振ラ
 ヌ日ハナシ。十日廿日過^スギニシカバ、ヤウヤウ間遠^{マドロ}ニナリテ、或^{アルイ}ハ四五度、二
 三度、若^{モシ}ハ一日マゼ^{ヒトヒ}^⑫、二三日ニ一度ナド、ヲホカタソノ余波^{ナゴリ}三月^{ミツキ}バカリヤ侍リ
 ケム^⑬。四大種^{シダイシュ}ノナカニ水^{スイ}・火^{クワ}・風^{フウ}^⑭ハツネニ害ヲナセド、大地^{ダイチ}ニイタリテハ殊^{コト}ナ
 ル変^シヲナサズ^⑮。昔^{サイコウ}、齊衡^{サイコウ}ノコロ^⑯トカ、大地震^{ヲホナキフ}振^フリテ、東大寺^{トウダイジ}ノ仏^{ブツ}ノミグシ落^ヲチ
 ナド、イミジキ事^{コト}ドモハベリケレド、ナヲコノタビニハ及^シカズトゾ。スナハチ
 ハ^⑰、人^{ミナ}皆^{ナラ}アヂキナキ事^{コト}ヲ述^ノベテ、イサ、カ^⑱心^{ココロ}ノ濁^{ニゴ}リモ薄^{ウス}ラグト見^ミエシカド、
 月日^{ツキヒ}カサナリ年^{トシ}経^{ケル}ニシノチハ、事^{コト}ハニカケテ言^イヒ出^イヅル人^{ヒト}ダニナシ^⑲。

■ 元暦2年（1185）、京の都は大地震に襲われ多大な被害に見舞われました。方丈記は、建暦2年（1212）に成立し、その中で前述の様にこの大地震のことが記されています。地震を体験した長明は「ソノサマ世ノ常ナラズ」と、尋常なものではなく大きな地震だったと、記しています。

■ 字句の意味

①「同ジコロカトヨ」： 方丈記には様々な災害や飢饉などが記されています。安元3年（1177）夜半、朱雀門、大極殿、大学寮などが焼失した京都の大火。治承4年（1180）京の街に吹き荒れた島風（竜巻）。養和年間（1181～82）干ばつ、台風、洪水で京の都は飢饉により死者多数。

「同ジコロカトヨ」 京都が災害に襲われたと同じころに発生した地震、それは元暦2年（1185）の大地震と比定されています

②「ヲビタ、シク大地震振ル」： 何度も何度も大地が揺れる

- ③「世ノ常ナラズ」： 尋常ではない
- ④「海ハカタブキテ陸地ヲヒタセリ」： 元暦2年（1185）大地震の震源は琵琶湖南部付近とされ、ここでいう「海」とは琵琶湖を指していると考えられます。「山槐記」（さんかいき・平安末期、中山右大臣の残した日記）には、「琵琶湖の湖水が北に流れ、湖岸が干上がったが後日になって地震前の岸边まで湖水が戻った」と、意味する記述があります。記されたこの地震も元暦2年（1185）大地震とされ、断層活動による直下型でM7.4、大津・京都の震度は6弱と推定する見解もあります。地震の被害は近江国から京都にかけて集中しました
- 「海ハカタブキ」は、大量の湖水が一方向に流れるとの意味と思われ
「陸地ヲヒタセリ」は、陸地を水浸しにした。地震の大きな揺れによって、湖水が波をなし陸地に流れこんだ
- ⑤「土サケテ水涌キ出デ」： 液状化による噴砂を言うのでしょうか、また、地面の割れ目から水が湧き出したのでしょうか。いずれも、地中から水が噴き出した状態が想像できます
- ⑥「谷ニマロビ入ル」： 谷に転げ込む
- ⑦「堂舎・塔廟ヒトツトシテ全カラズ」： 寺社の建物・寺院の堂塔は一つとして完全なものはない
- ⑧「地ノウゴキ家ノヤブル、音」： 地面が揺れ動く音、家が壊れる音
- ⑨「忽ニ拉ゲナントス」： すぐに押し潰されそうになる。
- ⑩「余波」： 余震
- ⑪「世ノ常」： 普通、世間並
- ⑫「一日マゼ」： 一日おき
- ⑬「ヲホカタソノ余波三月バカリヤ侍リケム。」： 大地震の余震はだいたい三か月ほど続いた
- ⑭「四大種ノナカニ水・火・風」： 四大種とは、仏教用語で地・水・火・風の四元素のことで、すべての物体はこの四つから成り立っているとしています。水・火・風の害を「世に三災あり・・・一は火災、二は水災、三は風災なり」と考えられています
- ⑮「大地ニイタリテハ殊ナル変ヲナサズ」： 四大種の中にあげられる大地は常に異変を起こさず、起こすとすれば突然の事である。の意味と考えます。
- ⑯「斉衡ノコロ」： 斉衡2年（855）の頃に地震が頻発しています
- ⑰「スナハチ」： その時、当座

- ⑱「アジキナキ事ヲ」： 思うようにならない、つまらない、道理に合わない、甲斐のない
- ⑲「イサ、カ心ノ濁リモ薄ラグト見エシカド」：
意訳：人々は皆、甲斐のない空しさを述べ合って、煩惱や執着といった心の濁りも、少し減少するかと見えたが。(新日本古典文学大系註訳)
- ⑳「事ハニカケテ言ヒ出ヅル人ダニナシ」： 事の端^へにかけて、言い出す人さえいない

■ 現代語訳

また、同じ頃であつただろうか、何度も何度も大地が揺れる事がありました。その様子は尋常ではありませんでした。山は崩れて川をうずめ、琵琶湖の大量の水が一方向に波をなし、陸地に流れ込みました。地面は裂け水が噴き出し、岩は割れて谷に転がり込みました。湖岸を漕ぎ行く船は波をうけて漂流し、道を行く馬は足元がふらつき思うように進めません。

京の都の付近では神社仏閣の建物が一つとして完全なものがありません。ある建物は崩壊し、またあるものは倒壊しています。街の中は塵や灰に覆われ、もうもうとした煙のようです。

大地が揺れ、家がうち崩れる音、雷鳴のように響き渡ります。家の中で避難していればすぐに押し潰されそうになります。外に走り出せば、地面に亀裂が割けます。人間には羽がないので空を飛ぶことが出来ません。龍であつたなら雲にも乗ろうものを、いや、それはできません。

恐ろしいものの中で、特に恐ろしいものは、ただ、地震なのだと思われました。このようなひどい揺れは長続きせず、しばらくして止むけれども、余震はしばらくの間は終わりません。普通は、驚くほど大きく揺れる地震で、2・30回も揺れる日はありません。十日、廿日も過ぎるならば、徐々に揺れは間遠になって、4・5回ないし2・3回、もしくは1日おきになり、その後は、2・3日に1回などと、多くの余震は3ヶ月ほど続きます。

仏教でいう四大種の中で水、火、風は日常的に災害をもたらします。大地は他の三つの災害のように日常的に災害を起こすことはありません。(突然起こることがあります)昔、斉衡の時代でしたか、大地震が起きて東大寺の大仏のお首が落ちてしまったなど、由々しい事件などがありました。それでも今回の地震には及びません。

地震で大揺れしている当座、人々は皆、甲斐のない空しさを述べ合って、煩惱や執着といった心の濁りも、少し減少するかと見えたが、月日がたち、何年か経ったのちには、事の端にかけて、言い出す人もいなくなります。

■ 九州地方で発生した「熊本地震」は、いまだ鎮静化していません。(5月19日現在) 発端は、4月14日 午後9時26分ごろ、熊本地方を震源とするM6.5、熊本県益城町で震度7の激しい揺れに襲われました。

揺れはその後も続き、16日午前1時25分ごろ、またしても熊本地方を震源とするM7.3、益城町と西原村では震度7の揺れに見舞われました。

報道によると震源の深さは約10km、活断層の変異による内陸直下型の地震です。

その後、地震は九州中央部を抜け拡大し、大分県では最大震度6弱を観測しています。気象庁は「当初警戒が必要な期間は一週間程度だと考えていたが、その後、広い範囲で地震活動が活発になる等、過去の例があてはまらず、見通すのは難しい」と伝えました。

5月19日現在、震度1以上の揺れは、1,500回を超えていると気象庁が発表し、熊本地震の終息は見通しがたたない状況下にあります。

■ (参考1) 気象庁震度階級関連解説表より、人間・屋内の状況を抜粋

震度	人間	屋内の状況
0	人は揺れを感じない	
1	屋内にいる人の一部が、わずかな揺れを感じる	
2	屋内にいる人の多くが、揺れを感じる。眠っている人の一部が、目を覚ます。	電灯などのつり下げ物が、わずかに揺れる。
3	屋内にいる人のほとんどが、揺れを感じる。恐怖感を覚える人もいる。	棚にある食器類が、音を立てることがある。
4	かなりの恐怖感があり、一部の人は、身の安全を図ろうとする。眠っている人のほとんどが、目を覚ます。	つり下げ物は大きく揺れ、棚にある食器類は音を立てる。座りの悪い置物が、倒れることがある。
5弱	多くの人が身の安全を図ろうとする。一部の人は、行動に支障を感じる。	つり下げ物は激しく揺れ、棚にある食器類、書棚の本が落ちることがある。座りの悪い置物の多くがたおれ、家具が移動することがある。
5強	非常な恐怖を感じる。多くに人が、行動に支障を感じる	棚にある食器類、書棚の本の多くが落ちる。テレビが台から落ちることがある。タンスなど重い家具が倒れることがある。変形によりドアが開かなくなることがある。一部の戸が外れる。

6弱	立っていることが困難になる。	固定していない重い家具の多くが移動、転倒する。開かなくなるドアが多い。
6強	立っていることが出来ず、はわないと動くことができない。	固定していない重い家具のほとんどが移動、転倒する。戸が外れて飛ぶことがある。
7	揺れにほんろうされ、自分の意志で行動できない。	ほとんどの家具が大きく移動し、飛ぶものもある。

今回は、人間と屋内の状況のみ記しました。屋外の状況、建物については別の機会にご紹介します。

テレビから伝えられる熊本地震の惨状は、建物の倒壊、土砂崩れ、避難所での暮らし等々大そう心痛みます。

今から約800年前に著された方丈記、地震に因る被害等について「月日がたち、何年か経ったのちには、事の端にかけて、言い出す人もいなくなります」 災害は忘れ去られてしまう。ということなのでしょうか。

近年の繰り返される地震災害を思うに、「災害は必ず起こる」の戒めが大切と思われます。

■ (参考2)

M (マグニチュード) : 地震そのものの大きさ (規模) を表すものさしで、地震エネルギーの強さを表すとされています。

震度 : ある大きさの地震が起こったとき、わたくしたちの生活している場所での揺れの大きさを表しています。

M、震度ともに、数値の大きい方が地震の規模、揺れが大きくなります。

Mは、1 増えると地震のエネルギーが32倍になります。2 増えると 32×32 となり、基準とするMの約1000倍になります。

例えば、M6の地震は、M5の地震32個分のエネルギーに相当します。

エネルギーの点で、広島型の原爆はM6.1に相当すると云われています。